

## 東京都心での 34 年にわたる春季花粉観測（第 1 報）

○今井 透（NPO花粉情報協会）、  
遠藤朝彦（遠藤耳鼻咽喉科・アレルギークリニック）

[はじめに] スギ・ヒノキ科花粉症の診断と予防、治療方針の決定と確認には、花粉情報（空中花粉の飛散予測と観測結果）が重要と考えられる。さらに新規開発の薬剤や発症機序の確認、林業対策、気象の影響研究などに関しては、花粉情報の果たしてきた貢献は高いと推測される。今回は特に花粉症患者の多い、都心での花粉観測結果の長期報告を行う。

「方法」 公式的には観測方法に関する指針は、1994年に決められた日本アレルギー協会の援助に基づいた基準に留まり、その後変更はない。今回の報告もその基準に沿って行ったが、患者の実感に沿うようにスライドガラスの交換は午前8時でなく、午前0時に行った。観測場所は初期には港区の慈恵医大病院屋上、その後は品川区の遠藤耳鼻咽喉科クリニック屋上で行った。観測データの比較には2月1日から4月30日を対象としたが、必要により前年12月から1月、5月の観測を行った年もあった。さらに自動計測器も数年間は併用した。

「結果と考察」 1984年から1986年はスギとヒノキ科花粉を区別せずに観測したが、1987年以降は2017年まではスギ、ヒノキ科、それ以外の花粉の3種に鑑別して観測した。1987年まではスギ・ヒノキ科花粉観測数は2000個/cm<sup>2</sup>/年以下だったが、1988年に4218個と初めて2000個を超えた。この傾向はその後も続いていた。スギ花粉飛散開始日は2月中旬が主であり、大きな変更はなかった。シーズン中の飛散パターンは年度により変化し、50%飛散は大量飛散年には春分の日付近になったが、少量飛散年はそれより1週ほど早めだった。スギ花粉とヒノキ科花粉の飛散観測数は相関することもあるが、ヒノキ科花粉の割合はほぼ15%程度だが年度差が大きかった。

「まとめ」 東京都心でのスギ・ヒノキ科花粉観測数は大きく増加した。飛散開始日は大きな変化はなかった。30年を越える花粉観測は全国で5か所となった。